

アカシア探検隊

九州アカシア会 会長
直撃インタビューの巻

甲.. おい、百周年の記念式典やら祝賀会やらメインの記念行事も無事終って、えかったのう。

乙.. はい。3日間とも天気に恵まれましたしね。なんか終って見ると早かったです。先輩もホッと一息つかれているみたいですね。(直前なんか、目が血走ってつたもんね)

甲.. お前も一息つきたいじゃろうが、そーはいかんで。

乙.. へ?

甲.. いつもの全国版の仕事! そのために百周年の仕事もゆるめにしてやったんだ。

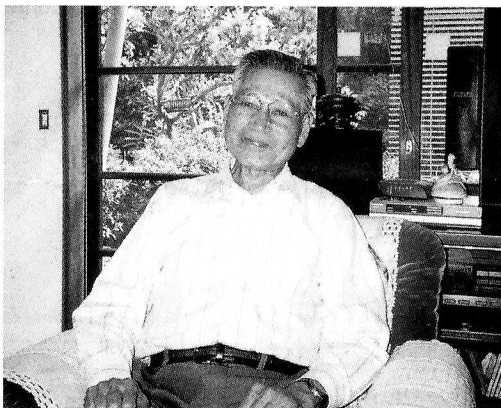
乙.. はいはい。次は二人でどなたを訪ねるんですか?

甲.. 前回は近畿アカシア会の会長の米澤先輩じゃったろ。今度は九州アカシア会の会長さんじゃ。

乙.. 了解!(明太子に博多ラーメン、そして夜は中洲じゃ。ラッキー。)そんでいつ行くんですか?

甲.. 先方の都合を聞いて、自分のスケジュールあわせて好きなときに行つてエエよ。

乙.. 先輩は?



井.. それまでは「福岡アカシア」と呼んでいました。福岡アカシア会は、終戦後間もなくの頃、九州大学工学部教授をしておられた渡部信夫先輩(16回)のお世話で始まったんです。毎年20名足らずのこじんまりとした集会だったんですが、それだけに先輩・後輩の親しみも深くて和やかな楽しい会でした。昭和46年頃、渡部先輩が定年退職されて福岡を去られたので、皆様方、特に35回の辻勇、中村優、高橋宏君らのご推挙に

よって私が代表世話人となりました。当初は順調に年一回ほど例会を催していましたが、高橋君らの転勤や私が福岡大学の教授に就任して多忙を極めた事などからだんだんと毎年の開催に苦勞するようになったんです。というのも福岡のアカシア会員は大学や学校の先生、或いは開業医、そして転勤族が多くて適当な世話役が見つかりにくかったんですね。そのころの私はアカシア会員を見れば世話役をお願いしてました。(笑) そうこうするうち、平成6年に福岡大学医学部を定年退職し、13年暮れには手術を受けるなどして、誠に残念ながら平成5年以降は10年も活動が休止してしまつたんです。

井.. そこにはアカシア会ならではのエピソードがありましたね。昨年の1月に福岡大学医学部学生の力田高德君(87回)のお母さんの力田ユミ子さん(51回・広島在住)、伊藤哲生君(51回)から相次いで電話があつたんです。それがきっかけでなんと福岡アカシア会を復活させようとの機運が一気に高まり、今日に至っているわけですが、要するに次のような構図だったわけです。福大学生の力田君がアカシア会のこと困っている事を知つた↓それをアカシア会員のお母さん

甲.. ワシや百周年の仕事がまだ忙しいんじや。一人で行つてこい。明太子やら博多ラーメンやら中洲やらも勝手にやつてこい。なんじやつたら福岡ドームでカープとソフトバンクの交流戦観てきてもエエよ。ただし、領収書もらうのを忘れんように。

乙.. わかりました!(やつた!まさかこんな日が来るとは。苦勞は必ず報われる。)

井.. 「福岡アカシア会」では近隣の県に在住している人に声を掛けにくいという声があつたんです。本部の規定では「支部は同一県内居住者をもって構成するのを原則とする」となっていました。本部の了承が得られ、「九州アカシア会」となつたんです。実際昨年の発足総会には、佐賀、沖縄を除く各県から参加がありました。

乙.. 話は変わりますが、附属中学時代の思い出をお願ひ致します。井.. やはり寮生活のことが思い出されますね。私の実家は吉田でしたから当然寮生活になるわけですが、50周年の記念誌にも投稿しましたが、先輩にいじめられたり、食事の献立を作つたり、入学したときは専心寮(1~3年)、攻学寮(4



